
赤い服の少女

冴木 昂

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

赤い服の少女

【Nコード】

N0300V

【作者名】

冴木 昂

【あらすじ】

看護師の美奈子は夜勤のときに老婦人を看取った。いつも穏やかな老婦人が、臨終の間際に残した言葉は、美奈子の胸に深く残った。遅い、と。

老婦人は何を待っていたのだろうか。

美奈子は死んだ老婦人の病室前で、赤い服を着た少女を目撃した。次に見たのは、交通事故の現場。そして、末期がん患者の病室前でも少女を見た。追いかけたが、少女は煙のように消えてしまっただった。

そんなとき、命の終わりに現れるという死神少女の話を目にする。
まさか、あの少女が？

第一話 臨終

美奈子はベッドに横たわる老女をじつと見下ろしていた。蛍光灯の灯りの下、血の気の無い肌が口ウのように青白い。清拭を終え、洗いたての浴衣に着替えていても、もう彼女の目は二度と開かない。穏やかな笑みを浮かべて、「看護師さん、ありがとう」と、感謝の言葉を述べることもない。ましてや、嫌悪感たつぷりの表情で、美奈子のがさつさをたしなめることすらもないのだ。

老女の亡骸だけを残したまま、美奈子は処置室のドアを開けた。母親の急変を聞いて駆けつけた家族五人が、処置室の外に待っていた。

老女の息子と思われる中年の男性が美奈子に問いかけた。

「あの、看護師さん、母は？」

美奈子は背後のドアにちらりと目をやって言った。

「明け方に息を引き取られて、こちらにいらつしやいます。今、担当の医師を呼んでまいりますので、処置室の中でお待ちください」事務的に言つて頭を下げる美奈子の横を、家族らが慌ただしく行き過ぎた。処置室のドアが開くと同時に、女性のすすり泣きが耳を打つ。美奈子は足早にその場を立ち去った。俯いたまま、内科病棟の長い廊下を歩いて行く。閉じ込めておいた涙が、とうとう溢れ出してしまい、廊下の中ほどにある患者専用のトイレに駆け込んだ。

看護師の仕事について、もうすぐ三年になる。特に末期の患者さんが多い内科病棟の担当になって丸二年が経とうとしているというのに、それでも、お世話をした患者さんが亡くなったときは、いつも動揺してしまうのだ。

どんなときにも冷静に、努めて明るく。

看護師長の口癖を思い出して、美奈子はトイレの個室でため息をついた。トイレトペーパーで鼻をかんて目元を拭うと、何とか感

情を抑えられそうだった。早く担当の先生を呼んでこななければいけない。当直明けだから、担当の佐藤医師はきつと自席に居るはずだ。

また、泣いているの？

からかうように言う、若い男性医師の顔が脳裏に浮かび、美奈子はぐつと唇を噛みしめた。

トイレから廊下に出たとき、目の端に赤いものが映った。何気なく振り返ると、廊下の向こう、先ほどの処置室前に赤いワンピースを着た少女が立っているのが見えた。少女は処置室の閉じられた扉をじつと見つめている。ノースリーブの肩口から出た腕が細い。背格好から考えて、年齢は小学校高学年か中学生くらいに思えた。亡くなった患者さんの家族かもしれない。美奈子は少女の方へ一歩、二歩と戻りかけた。すると、少女がこちらに気付いて振り向いた。小ぶりの顔の周りを、漆黒の髪が縁取っているが、廊下の薄暗がりでは表情がはつきり見えず、美奈子は目をすがめた。

「川辺さんのご家族のかたですか？」

大きめの声で問いかけると、少女は一歩、二歩と後ずさりをはじめた。美奈子が足を踏み出すと、少女は逃げるようにして廊下の角を曲がって走り去った。長いさらさらの黒髪が、華奢な赤い背中であぐらで揺れていた。

「瀬戸さん、またこんなところではーつとして、どうしたの？」

背後から男性の声がして、美奈子は振り向いた。男性は、レモンイエローのYシャツにノーネクタイで白衣を羽織っている。下がり気味の目がいつも笑っていて優しそうだと言いが、美奈子にとっては、ドジな自分の事を小バカにしているように見えるのだった。「あ、佐藤先生。川辺さんのご家族が到着されました。ご家族は今、処置室に……」

「そう。じゃあすぐに行かなきゃね。瀬戸さんさあ、ナースステーションに戻ったら、川辺さんのカルテ持ってきて」

「はい、わかりました」

一礼して立ち去ろうとする美奈子に、佐藤医師は柔らかな声で言

った。

「当直ご苦労さまでした。引継ぎしたら、早くあがってください。とても疲れた顔をしているよ。まあ、昨夜は本当にきつかったよね。僕もまさか川辺さんが……」

立ち止まって振り向いた美奈子に、曖昧な笑みを浮かべると佐藤医師は手をひらひらと振った。それは、「なんでもないよ」というゼスチャーだったが、どこか力なく見えた。

どうにも、いつもの彼らしくない。

美奈子は白衣を翻して大股で歩き去ってゆく佐藤医師の背中を見送って、小声で呟いた。

「佐藤先生、なんでもないよって顔じゃ、ないじゃん……」

引継ぎを済ませ、畳敷きの更衣室で白衣から私服に着替えると、ようやくホツとする。昨夜一緒の当直だった先輩看護師の真弓が、慌ただしく更衣室に駆け込んできた。

「美奈ちゃん、お疲れさまね」

「真弓さんこそ。私が川辺さんにかかりきりだったから、他の患者さんのお世話で大変でしたよね」

「うん、でもほら、泌尿器科の山下さんが一時的にヘルプに来てくれたから」

看護師の人数不足はこの病院でも深刻な問題になっていて、それを解消するためにこの病院では他科へ手伝いに行ったり、来てもらったりすることがある。ただし、他科の看護師が手伝えることは、それぞれの科でごくわずかなことに限られている。医療ミスやその他、責任を問われることを防ぐためだ。でも、たったひとりであたふたするよりも、誰かに来てもらえと思うだけで心にゆとりが出るものだ。美奈子も当直のときに、何度か他の科に手伝いに行っていたことがある。

「でも、正直言ってさすがに疲れたから、早く帰って、子供が学校から帰ってくるまでの間に寝るわ」

真弓はすごい早さでＴシャツとジーンズに着替えると、化粧直しもせずに更衣室を出て行った。働く主婦はパワフルだ。真弓を見るといつも思う。きっと彼女は、目の前で患者さんが亡くなっても、自分のようにぐずぐずと泣いたり、いつまでも気にしたりしないのだろう。昨夜、川辺さんの最後を看取ったのが美奈子ではなく真弓だったとしても、彼女はきっと同じように家に帰って、子供が帰宅するまで熟睡するに違いない。

美奈子は後ろでひとつに束ねていた髪を下ろすと、カバンを手に更衣室を出た。

スタッフ専用の通用口から表に出ると、灰色の空が広がっていた。梅雨時特有の湿気を含んだ風が吹いてきて、美奈子の白いプリーツスカートを揺らした。今にも泣き出しそうな空の下、病院の裏手にある看護師寮に帰ろうと思ったが、体はとても疲れているのに、眠れそうもない気分だった。美奈子は寮とは反対の、商店街へとつづく正門のほうへ向かって歩き始めた。

敷地内に植えられた桜の巨木を見上げながら、記憶の中へと迷い込む。今は頭上いっぱい緑の葉を茂らせているけれど、春は見事な花を咲かせていたつけ。その、薄紅の桜を見ながら、亡くなった川辺さんと散歩をした。ゆっくりと車椅子を押して歩く美奈子に、何度もお礼を言う老女。

これが最後の桜かもしれないわねえ。

そう言って見上げた白い顔は、全てを受け入れた者の穏やかな顔つきだった。

でも、昨夜臨終の間際に見せた表情は……。美奈子は歩きながらふるふると頭を振った。

末期の胃癌は激しい痛みとの戦いだ。川辺さんは、延命治療よりも痛みを和らげることを望まれた。だから、最後は意識が混濁していたのだろう。

「だから、あんなふうに……」

美奈子は独り言を呟いた。佐藤医師が駆けつけるまでの間、美奈

子と老女は病室に二人きりだった。発作に見舞われた老女は、苦悶の表情を浮かべて涙を流した。彼女は、枯れ枝のようになってしまった手で、自身の口を覆った酸素マスクをがっと剥ぎ取った。制止する美奈子の手を振り払い、歯の無い口を金魚のように開け閉めする形相は、正直言つて戦慄を覚えるほどに恐ろしかった。それでも美奈子はなんとか冷静さを保ち、苦しい息の下、最後の言葉を聞き取ろうと彼女の口元に顔を寄せた。饅えたような加齢臭に混じって、死の匂いが美奈子の首筋辺りにまとわりついてきた。

ぜいぜいという呼吸音しか聞き取れず、あきらめかけた時だった。血走った目をカツと開き、苦しんでいた老女がいきなり上体を起こしたのだ。そんな体力がいったいどこに残っていたのだろう。今思い返しても、有り得ないことだと思う。そのとき美奈子は驚いて、手にしていた酸素マスクを取り落としていた。透明のチューブにつながって、ベッドの脇にだらりと下がったマスクが揺れる。患者はひきつけたように痙攣したかと思うと、声を発した。

「この小娘は……。遅い、何故もつと早く来なかったんだい。まったく、本当に……。なんて役立たずな子……」

呻るような野太い声で言つて、老女はにたりと笑った。彼女がはつきりと言つた言葉を聞いて、美奈子は動くことが出来ず呆然と立ち尽くした。地獄の底から聞こえてくるような声は、優しい老女の声ではなかった。老女は言い終わるや否や、どさりと枕に沈んで動かなくなった。

今のは、なに？

サンダル履きの足音と共に佐藤医師が駆けつけてきたとき、美奈子は汗だくになって震えていた。

「せ、先生、川辺さんが……」

動揺してしまい、うまく今しがたの患者の様子を説明できなかった。美奈子は仕方なく、チアノーゼが出ていることと、意識混濁を告げたのだった。その後懸命に手を尽くしたものの、意識は回復することなく川辺さんは息を引き取った。

鬼のような形相で発した言葉がいったい何だったのか、もう知るすべは無い。小娘とは、いったい誰のことなのだろう？ 美奈子のことを指したという可能性もある。川辺さんから見れば、自分は間違いなく小娘だ。

でも……。美奈子は立ち止まった。昨夜のことを詳細に思い出そうと、ぎゅっと両目を閉じて、右手の指で目頭のあたりを揉んだ。

川辺さんは確かに「遅い」と言った。でも、自分はナースコールが入ったとき、すぐさま駆けつけたはずだったから、「遅い」と罵られてもどうしようもない。自分に落ち度はないはずだと、美奈子は自身に言い聞かせた。

きつと患者さんは苦しかったから、一秒が、まるで一分のようにな長く感じたのかもしれない。

病院の正門を出て、ゆるい坂を下っていくと、ぽつりぽつりと雨が降り出した。傘のない美奈子は、歩みを速めて目的地を目指した。『市立総合病院前』のバス停を通り過ぎて数十メートルのところに、レンガ造りの紅茶専門店がある。その店は、『紅茶館』という、ごくありふれた名前だが、店長の手作りケーキが絶品で、病院の看護師たちの行きつけになっていた。

もしも『紅茶館』で知り合いの病院スタッフに会えたら、このモヤモヤする胸の内を聞いてもらいたいと思った。できれば気心の知れた看護師がいい。

そんな都合のよいことを思いながら木枠のはまったガラス扉を引き開けた。スポンジの焼ける甘い香りが鼻をくすぐる。カントリイ調に統一された明るい店内は、店長の奥さんの趣味でパッチワークキルトがあちこちに飾られている。美奈子は素早く店内に視線を走らせた。木目の美しいカウンター席には、誰も居ない。三つある白木のテーブル席のうち、一番奥に、黒っぽいスーツを着た女性客が一人で座っているだけだった。

美奈子は落胆して、大きく息を吐いた。どっと疲れが襲ってきた。彼女は高さのあるカウンター席によじ登ると、奥に向かって声をか

けた。

「こんにちは。お客さんですよ」

カウンターの奥から、エプロン姿の中年男性が顔を出した。

「やや、いらっしやい。今ちようどケーキのスポンジをオープンから出したところでね。手がふさがってて」

小太りの店長は、メガネの奥の目を細めるようにして、人懐っこい笑みを浮かべた。やはり「マスター」というよりは「店長」という呼び方が似合うな、と美奈子と思う。店長は美奈子の前にメニューを押しやりながら尋ねた。

「降ってきた？」

「へ？」

「雨だよ、雨」

ああ、と頷いて、美奈子は自分の前髪をかきあげた。細かい雫でしつとりと湿っている。

店長はメニューを渡しておきながら、注文も聞かずに勝手に紅茶の茶葉をブレンドし始めた。

「疲れてるときは、香り豊かなロイヤルミルクティーがいいんだよ」
美奈子はクス……と笑ってメニューを返却する。さっき佐藤医師にも言われたが、そんなに疲れた顔をしているのだろうか。

「昨夜ね、患者さんが一人、亡くなっちゃって……」

「そっか、看護師さんも辛い仕事だね」

店長は湯気を立てているティーポットを手に取った。甘い焼き菓子と紅茶の香りが混ざり合い、美奈子の首筋にまわりついていて死の匂いを消し去ってゆく。

末期の患者さんも扱う病棟だからといって、毎日のように誰かが亡くなるというわけではない。元気になって退院してゆく人だつてたくさん居る。人が亡くなるという感覚に慣れたくないし、患者さんはどんな病気であろうとも、命があるかぎり、ぎりぎりまであきらめないで欲しいと思う。そのことを店長相手に口にしようとしたときだった。

美奈子の視界の端に、赤い色が横切った。ふと入口近くのガラス窓に目を向けた美奈子は、バス通りを挟んで反対側の歩道を歩く、赤いワンピースの少女を見つけた。今朝、川辺さんの処置室前に居た少女に違いない。長い黒髪を肩まで垂らした少女は、自然光の中で見るととびきりの美少女だった。小さな顔に、大きな黒い瞳がとても印象的だ。

美奈子はカウンター席から滑り降りると、通りが良く見える四人掛けの座席に移動した。赤い服の美少女は、一人ではなかった。黒のタンクトップに迷彩柄のボトムズを腰ではいた男の子と一緒に。美奈子はふつと微笑んだ。男の子の後を、一歩下がってついてゆく少女がとても初々しくて微笑ましい。絹糸のような銀色の雨の中で傘も差さずにゆっくりと歩いて行く二人は、どこかメルヘンチックだ。

彼らに重ねて、自分の少女時代のことなどを心の中で振り返ってみる。初めてのデートは、中学二年生のときだったっけ……。

男の子は高校生くらいだから、あの女の子は中学生かな。雨の中の二人から目をそらしたときだった。

大きなブレーキの音が響き渡った。ほんの一瞬の出来事だった。美奈子が再び目を向けたときには、通りの中央、赤い軽自動車の前に、男の子がうつ伏せで倒れていた。美奈子と店長は同時に店のドアに飛びついた。交通事故だ。

赤い軽自動車の運転席から中年の女性が降りてきた。女性は腰が抜けたようによろめいて、倒れた少年にとりすがった。

美奈子と店長がバス通りを横切って近づいたとき、少年がゆっくりと上体を起こした。美奈子はほうと息を吐いた。

死んでなかった。

それでもケガをしている様子で、少年は一度上体を起こしたものの、すぐにくず折れてしまった。彼は苦痛に顔を歪めて、濡れたアスファルトに横向きで転がり、えびのように身を縮めた。美奈子は冷静さを取り戻すと、少年に駆け寄った。

蒼白な顔で少年に取りすがっている女性ドライバーに、救急車と警察を呼ぶように声をかけた。すると少年が呻いた。

「お願い……。警察は、呼ばないで……」

女性ドライバーはどうしていいかわからないと言った様子で美奈子の顔を見上げる。

「警察は呼ばなくていいから……。オレ、大丈夫だから。お願い……。五万円くれたら、それで病院に行くし……」

少年は口からごぼりと血を吐いた。もしかしたら内臓が傷ついているかもしれない。

「五万円なんて、今、持ってないの。さ、三万円しかない」

そう言って、女性ドライバーはどこから財布を取り出して三枚の紙幣を少年の手に押し込んだ。美奈子はキツと女性を睨んだ。

「なにしているんですか！ そんなことよりも、早く救急車と警察を」

「やめて！ お願いだから……」

少年は美奈子の手を振り払おうとして顔をしかめた。背丈が大きかったから高校生かと思ったが、良く見ればまだあどけない顔をしている。もしかしたら、少女と同じくらいの年齢なのかもしれないと、関係のないことが頭をよぎる。

あれ……？

美奈子は周囲をぐるりと見回した。赤いワンピースの少女が居ない。彼氏が事故にあったというのに、彼女はどこへ行ってしまったのだろう。

周囲がざわつき始めた。道路を塞ぐようにして止められた赤い軽自動車、後続車が追い抜いてゆく。美奈子はイライラしてきた。誰も警察や消防に電話をしていないのだろうか。また一台、黒いスカイラインが徐行して追い越してゆく。少年は相変らず転がったままで「警察はやめて」と繰り返している。

今、追い越したスカイラインがハザードを点灯して、すぐそばの路肩に停車した。黒光りするドアが開き、運転席から黒いスーツの

女性が降りてきた。美奈子は、その女性がさつき店のテーブル席に居た人だと気付いた。

スーツの女性はワンレングスの髪を揺らして駆けてきた。走りながら大きなよく通る声で言った。

「私の車に乗せましょう。とにかく病院はすぐそこなんだから、救急車より早いわ。みんなでケガ人を運びましょう」

美奈子は大きく頷くと言った。

「私、その病院の看護師です。ご案内しますので、救命の搬送口へ車をつけてください」

女性は、集まり始めたやじうまの男性たちに向かって、テキパキと指示を出した。

「頭側に二人ついて。腰の部分を支えてね。そつと、ゆっくり運んでちょうだい」

少年をリアシートに乗せると、美奈子は助手席に乗り込んだ。携帯電話で病院の救命に直通電話を入れる。

スーツの女性は、店長と事故を起こした女性ドライバーに向かって大きな声で言った。

「とにかく、警察に電話して事情を説明しなさいよ、わかった？」

スカイラインはUターンして走り出した。

「お願い……やめて」

後部シートで呻く少年の声がかすかに聞こえて、美奈子は助手席から振り向いた。少年はぐったりと目を閉じたまま動かない。雨に濡れた右手に、さつき女性ドライバーが押し込んだお札がぎゅっと握られていた。

救命の搬送口では、男性看護師と医師が待っていた。スーツの女性と美奈子が手伝って、四人で少年をストレッチャーに載せた。

「今、ちょうどオペが終わったところだ。手が空いていて、よかったよ」

色黒の救命医は、白い歯を見せてにまっと笑う。彼は、ストレッチ

チャアの横に付き添う美奈子を、まるで値踏みするみたいな視線で見ながら言った。

「キミ、内科の子だね？ このボウズと知り合い？」

「あ、内科の瀬戸と言います。この男の子は、私が見ている前で偶然交通事故にあつたので連れてきました。知り合いではないです」

言いながら、美奈子は色黒医師の名札に目をやった。『救命救急・

医師 浅川』と書かれている。浅川医師は「ふうん」と言つて、今度は少年を見下ろした。美奈子の逆側に付き添っていた男性看護師が言った。

「浅川先生、この子って……」

二人は目と目を見交わして、複雑な表情をした。美奈子は二人の様子から、病院内の暗黙のルールを思い出した。救命はとても忙しいと聞いている。飛び込みで急患を連れてきたからには、それなりに感謝の意を表さなければいけないのだろうか？

難しい顔つきの浅川医師に、美奈子は恐る恐る尋ねた。

「あの、私、当直明けなんですけれど、何かお手伝いできることがあればおっしゃってください」

浅川医師と男性看護師は再び顔を見合わせたが、そのまま何も言わずに患者を処置室に運び入れた。

何か手伝おうかとカバンを下ろした途端、美奈子は処置室の外に追い出された。彼女は狐につままれたように、ぼんやりと閉ざされたドアの前に立っていた。さすがに、救命にヘルプに来たことはないから、あの二人がどんな人間なのかよくわからないけれど、締め出されたということは、美奈子に手伝えることなど、何もないのだろう。

カバンを肩に掛けなおし、どうしたものかと廊下をうつろっていると、男性看護師が処置室から出てきた。美奈子は無意識に彼の二キビ面から胸の名札へと視線を走らせた。

『救命救急・看護師 宮下』とある。宮下は美奈子のそばに来说ると言った。

「さつき、何か手伝うって言ったよね？　じゃあさ、さつきの男の子の身元、調べてよ」

「へ？」

何でそんなこと？　と、問いかけるような表情になっていたのだろう。宮下が上からモノを言った。

「病人の世話だけしてりやいってもんじゃないんだよ、救命は。搬送されて治療してやつても、どこの誰とも名乗らずに、無銭飲食ならぬ無銭治療で消える不届き者がいやがる。だから、早めに患者の身元を確認しなきゃいけないんだ」

そんなことまで気にしなければいけないのだろうか、美奈子はぼんやりした顔で宮下を見た。彼はイライラしたように言った。

「さつきの男の子だけど、半月ほど前にも運び込まれたんだ」

「え？」

宮下は、何が言いたいのだろうか？　美奈子が問いかけるような眼差しを向けると、彼は吐き捨てるように言った。

「打撲による内臓損傷で腹ん中縫ったつてのに、二日後に病院から消えたんだ」

美奈子は大きく目を見開いた。なんてムチャなことをするんだろう。どんなに宮下たちが心配して探したことが、目に見えるようだった。

「交通事故なら、警察に聞けばいい。救急車は呼ばなかったみたいだけど、警察には連絡したんでしょう？」

警察を呼ばないで

呻くように言う少年の言葉が、美奈子の脳裏に甦る。

ボタンと背後でドアが開閉する音がした。振り向くと、処置室の向かいにあるオペ室から、ストレッチャーに乗った患者が運び出されてきた。ブルーの手術着スタイルの看護師が二人、付き添っている。廊下に立ちふさがる形になってしまった美奈子は、慌てて宮下看護師の隣に身を寄せた。ストレッチャーの一団は、ガラガラと大きな音をたてながら、美奈子の前を通り過ぎた。ちらりと患者に目

を落とすと、小学生くらいの女の子だった。ずれた毛布から、首や胸に当てられたガーゼや包帯が見える。何本ものチューブが彼女の体から伸びていた。

ICUに運び込まれる女の子を見送っていると、隣の宮下がぼつりと言った。

「さつき運ばれてきたんだ。あの子、大やけどを負っていてね。かなり厳しい」

「え？」

美奈子が振り向いた時には、宮下はもう踵を返して処置室に入ってしまった。

夜勤明けの疲れで頭痛がする。美奈子は暫くの間、救命の廊下をうろつろと歩きまわっていたが、入口に一番近いソファに腰を下ろした。少年を運んでくれたスカイラインの女性は、いつの間にか居なくなっていた。

「みんな、忙しいのね……」

ぼつりとつぶやくと、また目の端にすうつと赤い色がよぎった。そちらに顔を向けると、廊下の突き当たりに、赤いワンピースの少女が立っていた。美奈子は目をしばたいた。いつの間に来たのだろう。しかも、入口付近に陣取っている自分の前を、いつ彼女が通ったのか、わからなかった。どこかに別の出入り口でもあるのだろうか。

美奈子は立ち上がると、少女に近づいていつて声をかけた。

「彼氏、今治療しているから。心配しないで」

少女はつぶらな瞳を大きく見開いて後ずさった。なんだか気の毒なくらいに怯えている。とうとう背中が壁にぶつかった。

「交通事故見ちゃったんだもんね。怖かったよね」

そう言って笑顔を向けると、少女が囁くような声で言った。

「あなたは……誰？ どうして私に話しかけるの？」

美奈子は笑顔のままで言った。

「私はこの病院の看護師なの。だから、あなたの彼氏を助けようと思つて、ここへ連れて来たのよ」

「彼を、助けてくれるの？」

大きく頷くと、少女は安心したように笑みを浮かべた。まるで花が咲いたように可愛らしい笑顔だ。

「ねえ、彼氏は前に内臓損傷で手術をしたんですつて？」

尋ねると、少女は笑顔を引つ込めた。花がしぼんで、悲しい顔になる。美奈子は自分のデリカシーの無さを呪つた。

「あの人は、……また体が傷ついたの？」

少女は泣きそうだった。「また」というフレーズが気になったが、とりあえず少女を安心させようと思い、美奈子は「大丈夫よ」と言つて少女の肩をポンと叩いた。手のひらの下にある、その華奢な骨格にちよつと驚く。

「お願い、あの人を助けて。私にできることは、何でもする」

美奈子は彼女が可哀想になつてしまつた。一刻も早く、安心させてやらなくてはいけない気がしたので、処置室を覗いてきてあげると請合つた。

ノブに手をかけて、そつと処置室のドアを開けると、ちょうど手当てが済んだところだった。

振り向いた色黒医師が、マスクを外しながら言つた。

「左腕を骨折してるね。あとは、全身を強打したときに、前回やられた脾臓の傷から出血したみたいだ。でもまあ、微量だから、とりあえず応急処置はこれまでだね。後は様子を見て精密検査に回すかどうかで感じかな。どちらにしても、数日入院して安静にしていれば大丈夫だよ」

美奈子はぺこりと頭を下げた。目を閉じて横たわる患者を見てみると、背後から宮下が小声で囁いた。

「警察に、聞いてみた？」

美奈子はビクンとして振り返ると、宮下を睨み付けた。ケガをした少年を患者のように扱う彼が、なんだか気に食わなかつた。もと

もと彼のニキビ面も美奈子の趣味では無い。

「大丈夫です。彼のお友だちが駆けつけてきましたから。ご心配には及びません」

ややつつけんどんに言うと、宮下は「そう、よかった……」とマスキの中でもごもご言って、気弱そうに目を伏せた。

美奈子は看護師寮の自分の部屋に戻ると、どさりとベッドにひっくり返った。もうすでに三十時間以上起きている。そろそろ体が限界だった。

うつらうつらする頭で、赤いワンピースの少女のことを考えた。

美奈子が少年の容態を見て処置室から戻ったとき、少女の姿はどこにも無かったのだ。あれほど心配していたから、まさかいなくなるとは思っていなかったのだ、かなり焦った。後から廊下に出てきた宮下に、思い切り嫌味を言われてしまったことも、気分が悪かった。

で、男の子の身元は確認できたんだよね？ え？ まだ聞いてないって、どういうこと？ しっかりしてよ！

紅茶館の店長が警察に連絡しているはずだから、万が一あの少女と会えなくてもきつとなんとかなるだろう。

考えることに疲れてしまった美奈子は、頭の中で勝手に解決させると気だるい眠りの中におちていった。

第二話 死神

翌朝申し送りのあとで、美奈子は看護師長に呼ばれた。

「瀬戸さん、すぐに事務局まで行ってもらえないかしら」

美奈子は首をかしげた。本館にある事務局へは、この病院に勤務したときと、看護師寮に入所したときにしか足を踏み入れていないもの問いたげな美奈子に、看護師長が低い声で言った。

「昨日、救命にお世話になってしまったんでしよう？ あなたが飛び込みで患者を連れてきたって、あっちの師長に言われたんだけど」

「でもあれは……」

「とにかく、なんか知らないけれど行つてらっしゃい」

美奈子は正規の手続きに従つて、救急車を呼べばよかったと後悔した。目の前に病人が居て、いちばん早い方法をとつただけなのに、何がいけなかったのだろう？

不満を抱えたまま、本館五階の事務局に行った。ドアを押し開けると、フロア内は別世界だった。男性はスーツにネクタイで、女性はベストにタイトスカートというかつこうで仕事をしている。その中で、たった一人だけ、白衣姿の宮下看護師は浮いていた。

彼はフロアの壁際に押し付けられた応接セットに、背筋を伸ばして座っていた。こちらに向けられた背中が緊張しているのがよくわかる。彼の肩越しに、事務局長の険しい顔が見え隠れしていた。細面の顔に銀縁メガネをかけているが、美奈子にはインテリというより何故かカマキリに見えた。

フロアの入口で突つ立ったままの美奈子を見つけて、カマキリが手招きした。

事務局長の仕草を見て、宮下が振り向く。

美奈子が会釈をして宮下の隣に腰を下ろした途端、彼は苦々しげに言った。

「瀬戸さん、やっぱりあいつ、消えたよ」

唇を噛む宮下に問い返さずとも、美奈子はすぐに事態を理解した。あいつとは、いわずと知れた例の少年だ。

まさか、そんなことになるとは思っていなかったもので、今日仕事を終えてから警察へ問い合わせてみるつもりだった。

「消えたって……そんな……」

救命医の浅川医師の診断では、安静が必要だったはずだ。

「まったく、二度も踏み倒されるなんてごめんですからね」

宮下と美奈子は、事務局長から散々嫌味を言われてしまい、事務局を出た時にはとても嫌な気分だった。

まったく関係ないが、自分が連れてきた少年がしたことに対して、なんとなく宮下に謝罪しなければいけないのかな、と思った。

エレベータを待つて、険しい顔で佇んでいる宮下に、美奈子は小さな声で謝った。

「宮下さん、ごめんなさい。あたしが昨日のうちにしっかり身元を聞いておけば……」

「ええ？　なんで？　瀬戸さんが謝ること、ないよ」

宮下は驚いたように言つて、隣的美奈子を見つめた。

「でも、怒っていらつしやるでしょう？」

彼の眉間のシワが気になって、そう言つと、

「いや、悪いのは僕です。あんなことになるなんて……」

「え……？」

エレベータが到着して、会話が中断された。背広姿の男性が二人降りてくると、中は無人になった。美奈子と宮下は二人きりでエレベータに乗った。

ボタンを操作する宮下に、美奈子は続きを促した。彼は寂しげな笑みを浮かべると、ぽつりと言った。

「昨夜、やけどの女の子が亡くなつたんだよ」

美奈子は大きく目を見開いた。昨日才ペ室から運び出されてきた少女のことだとすぐにわかった。危険な状態だと言っていたが、ダメだったのか。あんなに幼くて、まだまだこれから楽しいことが待

っているはずだったのに。黙り込んでしまった美奈子に、宮下が言った。

「ぼくがもっと早く、あの子の急変に気付いてあげていたら……」

美奈子はなんと言葉をかければいいのか思いつかなかった。目の前で命が消えてゆくことの衝撃と辛さはよくわかる。

「でも……キケンな状態だったのでしょうか？ 宮下さんのせいじゃないですよ」

かろうじてそう言葉をかけたが、宮下は背をまるめたまま俯いているだけだった。

エレベータが一階に到着した。救命と内科は本館を挟んで正反対の場所に位置している。もう少し、宮下についていて話を聞いてやりたいという衝動にかられたが、お互いもう仕事に戻らなくてはならない。

エレベータを降りて、一歩二歩と歩き出したとき、前をゆく宮下が急に立ち止まって振り向いた。彼の目が潤んでいる。

「ぼく、職場を離れてしまったんです。あのとき……。あの少年が消えたことに気付いて、病院の外を探してた。看護師長は急患で処置室に入ってて、浅川先生ももう一人の看護師と一緒に別の患者さん見てて……」

宮下の目に涙の膜が盛り上がって、今にも溢れてきそうだった。

美奈子は慌てて目を伏せた。なんということだ。彼がちよっと目を離れた隙に、あの、やけどを負った女の子の容態が悪くなってしまうのだ。

どのくらい放置したのかわからない。でも、救命は一階にあり、宮下が外に出るのにたいして時間はかからない。看護師長に正直に報告したと彼は言うており、それに対して何も咎められなかったところを見ると、おそらく、ごくわずかな時間だと思う。厳密に調べらるならば、バイタルチェックの機械と照合すれば放置時間は正確にわかるはずだ。

でも、問題はそこじゃない。彼は美奈子と同じだった。肝心なと

きに、いつもと違う動きをしていたとか、精一杯の対応が出来なかったとか、そういうことなのだと感じた。そして、そのことで自分を責めているのだ。

黙って俯く美奈子に「ごめん」と言つて、宮下は救命のある別館に走って行つた。

川辺さんの居なくなった病室には、もう別の患者さんが入っていた。ベッドの空き待ちはものすごい件数だと聞いているから、病院側にしてみればどんな形にしろ動きがあつたほうが儲かるのだろう。こんなふうには、病院経営を損得勘定で見たことは今まで一度も無かつた。ここは市立の病院だから、積極的な経営をしてはいない。けれど、さつき事務局に行つて思い知つた。あそこに居るのはみなお役人なのだと。だから、とりそびれた治療費のことをとやかくつつくのだ。宮下の気持ちなんかまつたく考えてやらないで、文句ばかり言う事務の担当者に腹が立つた。

憂鬱な気分のまま職場に戻ると、すぐ近くの病室から出てきた真弓が心配顔で寄つて来た。

「看護師長に呼ばれてたけど、何かあつた？」

美奈子は廊下の隅に真弓を引っ張つていくと、昨日の事故のことからさつきの事務局のことまですっかり話した。真弓は顔をしかめて聞いていたが、特に宮下に同情するでもなく、事務の男性に怒りを向けるでもなかつた。彼女の反応に、ちよつと拍子抜けした美奈子は、気になつていたことを尋ねてみた。

「真弓さんは、目の前で患者さんが亡くなることが、嫌じゃないんですか？ それとも、もう慣れっこになつてしまつたとか？」

最後のセリフは、八年も内科に居る彼女に対して、かなり嫌味が入っていると思つたが、口から出てしまつた以上、とりかえしがつかなかつた。真弓は曖昧な笑みを浮かべると、声のトーンを落とすと言つた。

「さすがに……『慣れっこ』と言われると傷つくけど」でも……と、

彼女は続けた。「もう治らないとわかって、それでもつらい治療に堪えている患者さんに対して、美奈ちゃんみたいに心の底から素直に『ガンバレ』なんて、言えないときがあるよ」

美奈子は真弓の顔を、まじまじと見た。

どんなときでも冷静に、努めて明るく。

看護師長のお決まりのセリフが美奈子の頭の中でぐるぐるする。明るく励ますことは、いけないことなのだろうか？

真弓は母のような笑みを浮かべて、ポンポンと美奈子の背中を叩いた。

「美奈ちゃんは、今のままでいいんだよ。患者さんが亡くなっちゃうたびに隠れて泣いてる、そんな優しい看護師さんだって、患者さんにはきつと必要なんだから」

「真弓さん……。知ってたんだ」

美奈子は恥ずかしくなつて俯いた。

「でもね、美奈ちゃん、覚えておいて。患者さんにとって、生きること自体が地獄の苦しみだつてこともあるんだよ。早く苦しみから解放されたいって、そう考えている人にとっては、周囲の笑顔が苦痛なときだつてある」

美奈子は自分の顔に手をやった。真弓の言葉は、深く重い響きがあった。

「ある末期ガンの患者さんがね、ニコニコしながらこんなことを言つてた。早く死神に会いたいんだよつて」

「死神なんて……」

不吉な言葉に美奈子は眉根を寄せた。真弓はクスツと笑った。

「私もね、今の美奈ちゃんみたいな顔してたんだと思う。そしたらその患者さんがね、言ったの。余命二ヶ月と宣告された日に、夢を見たんですつて」

「死神の？」

美奈子の問いに、真弓は頷いた。

「死神が、いつ命をもらいに行けばいいですかつて、言つたんだつ

て」

「なんか、怖くないね」

「そう。死神はカワイイ女の子だったんだってさ。患者さんは、『いつでもいいよ』って言ったそうよ。すると女の子は、申し訳なさそうにこう言っただけですって」

「なんて？」

美奈子は興味をそそられて先を促した。

「予定より早いですが、一ヶ月後の何時何分に伺いますけど、いいですか。あんまり詳しい時間を言うものだから、なんだか面白そうだと思うた患者さんが、二つ返事で了承すると、死神がまた遠慮がちにこう言ったの。あまった残り一か月分の命を、他の人にあげてもいいですかって」

「はあ？」

「なんか、面白いでしょう？」と笑って、真弓はナースステーションに戻って行った。

真弓の後姿をぼんやりと見送りながら、美奈子はふと思った。

本当に、死神の女の子は、一ヶ月後のその時刻に、命をもらいに来たのだろうか……？

午後の回診に同行するためナースステーションを出ると、私服姿の宮下が訪ねてきた。

「ごめん、瀬戸さん、忙しかった？」

美奈子は「大丈夫です」の意味を込めて笑顔を作った。宮下は、昨夜当直だったと言っていただけ。それにしても、本当なら午前中に帰宅してよいはずなのに、もう午後三時になるうとしている。やはり救命は忙しいみたいだなと思った。

宮下は、これから例の少年の件で警察に行ってみるつもりだと言った。

「昨日は瀬戸さんに嫌味なこと言っちゃったけど、結局あいつに逃げられたの、僕の責任だから」

相変わらず疲れたような微笑だったが、今朝会ったときよりは色艶が戻っている気がした。

美奈子は帰ろうとする宮下に、真弓から聞いた死神の話をした。

「……だからね、とても苦しい状態の患者さんには、神様がその苦しみから解放してあげようとして、不思議な女の子を使わすんじゃないかって。そういう話」

真弓の受け売りでそう言うと、宮下はニキビ面をくずして「あはは」と笑った。

「理沙ちゃんが、怖い死神に連れて行かれたんじゃないかって、よかった。可愛い女の子だったら、きつと今頃一緒に遊んでいるのかな」
理沙ちゃんって言うのか。あのやけどの女の子。

宮下を見送ってから、美奈子は佐藤医師に付いて各病室を回った。佐藤医師は丁寧に一人ひとりと会話をしながら診察してゆく。それは昨夜見たドラマの話だったり、世間を震撼させている連続殺人事件のことだったり、半分以上が雑談だ。彼曰く、このコミュニケーションをとりながらの診察は、とても大事な治療法のひとつなのだそうです。美奈子にはイマイチよくわからない。けれども、どの患者さんも、佐藤医師の回診を心待ちにしていることだけは間違いなかった。回診は、美奈子にとっても一番楽しみな時間だ。

美奈子は佐藤医師に続いてワゴンをがらと押しながら六人部屋に足を踏み入れた。

病人とは思えないほどに元気のよい挨拶が、あちこちから上がった。

この六人部屋のメンバーはいいキャラが揃っている。

「先生、尻が痛いんだよ。何とかなんかね」

床ずれが痛いとは毎回喚く寝たきりの平助おじいさんがいつもの文句を言う。佐藤医師は笑顔で対応し、平助おじいさんを横向きに転がすと、寝巻きの裾をめくった。

「ああ、またいつものところだね。床ずれになりかかってる。栄養のバランスが偏っていると治りが遅くなりますから、出された食事

はきちんと食べてくださいね」

「あんな不味いもん、食えるかよ」

美奈子は診察を終えた老人の体位を変換し、下着を整えると、一通りの悪態を聞き流した。隣のベッドに移動して、痰のからみやすい和久さんの喉を吸引し、加湿器をチェックしている間も、平助おじいさんはぶつくさ言っている。

「あー、家に帰りてえなあ」

おととい再手術を受けた患者さんの、尿と腹部の張りを確認していた佐藤医師が、おじいさんの声に思わず苦笑する。

内科病棟は入院期間が長期の人が多い。ときおり一時帰宅を許されるが、この病室では長い人で、もう二年以上も入院している。

美奈子は窓の外に目を向けた。向かいの病棟の窓枠が、初夏の陽を浴びてチカリと光っている。毎日同じ風景を眺めて過ごすのは、どんな気分なのだろうか。

佐藤医師と呼ばれ、美奈子は我に返った。

「瀬戸さん、例のチェック、頼むよ」

そう言つて、佐藤医師はチャリと小太りの患者さんを見やった。糖尿の三俣さんの持ち物検査のことだと気付いた。彼はよく目を盗んではカロリーの高いお菓子やつまみを隠し持っていたりするのだ。先日など、ベッドの中にビールの空き缶を見つけて、美奈子は仰天してしまった。夜に眠れない小山さんは、今熟睡中だから邪魔をしないことにして、一番若いアツシくんのベッドに近づいた。ぐるりと閉められたカーテンをさっと開くと、彼は枕の下に慌てて何かを隠した。

「検温です」と言つて、掛け布団をめくると、ばさばさとヌード雑誌が床に散乱した。

そんなふうにして一時間ほどかけて、自分の持ち場を回る。残すはあと個室一箇所となった。フロアの一番奥にあるその個室には、川辺さんのように末期ガンの患者さんが入院している。

美奈子は軽くノックをすると、病室のドアを押し開けた。白い室

内に眩しい陽射しが溢れている。角部屋の個室は、入って正面と左手に二箇所の窓があるので、他の病室よりも明るい。梅雨の晴れ間で青空が覗いている本日は、窓を大きく開け放つと、桜の葉のそよぎが爽やかに聞こえるだろう。美奈子は患者さんに声を掛けてからベッドのまわりをぐるりと取り囲んでいる白いカーテンをそつと開けた。患者さんは四十代の男性だ。彼は目を開けると、浮腫んだ顔をこちらに向けた。奥さんの、たつての希望で本人には病気の告知をしていない。

「松谷さん、今日はとてもいい天気ですよ。気温も暖かだから、ちよつと窓を開けてみますね」

美奈子は患者さんに風の当たらない箇所を選んで、窓を細く開けた。淀んだ室内の空気がすうつと表に流れてゆくのがわかる。空気と一緒に、病気も流れて行けばいいのに、そう思った。

「……だつたんですね」

ふいに松谷さんがぼそりと呟いた。聞き取れなくて、急いでそばに歩いて行くと、彼はにこりと笑って言った。

「さっきのは、看護師さんだつたんですね。いいですよ、ぼくはもう……。治療費も高いし、妻と子供に負担をかけたくないから……」
「え？」

美奈子は首をかしげた。きつと夢でも見ていたのだろう。痛みを和らげるために、松谷さんの点滴の中にはモルヒネのような成分が入っている。頭が朦朧として、そばに居るものの顔を見間違えたり、ふいに意識が途切れたりするのは、よくあることだ。

「もうすぐ面会時間になりますからね。そうそう、この間、上のお嬢さんが私の顔を描いてくれたのよ。本当に上手ですよね」

美奈子はそう言つて、枕もとの壁を見やった。大きなコルクボードが貼られており、たくさんの写真と「大好きなパパ」とタイトルがつけられた似顔絵が飾られている。松谷さんは満足気にボードを見やると目を閉じた。

容態は安定しているようだが、さっきの発言が少しだけ気になる。

後で佐藤先生に報告しておこう。

美奈子は検温のページに走り書きをして病室を出た。出た途端に、美奈子の心臓がドクンと鳴った。

廊下の向こう、二十メートル先に赤いワンピースの後姿があつた。短めのスカートからのぞく、細くて長い足がふわふわと軽やかに、床を蹴る。思わず見とれていると、彼女はふわりとスカートを揺らして、風のように階段を駆け下りて行った。

「あ、待つて！」

女の子を捕まえれば、あの男の子の消息がわかる。美奈子はここが病院の廊下だということを頭の中から追い出して、猛然とダッシュした。足には自信がある。これでも高校のときは陸上部だったのだ。手すりをつかんで階段を一段抜かしで駆け下りる。下のほうから軽やかに走る靴音が響いてきた。きつとあの少女に違いないと確信した。

靴音は、まるでリズムを奏でるように美奈子を誘う。三階から一階まで一気に駆け下りて廊下を見やると、赤いスカートが残像を残して渡り廊下の方へと曲がってゆくのが見えた。

美奈子は躊躇わずに追いかけた。渡り廊下の先は本館のロビーだ。午後四時を回った今の時間帯は、外来が終わってメインのガラス扉は鍵が閉まっている。メインの扉の脇に、緊急用の出入り口はあるが、そこには警備員が立っているの、表に出てゆくためには、必ず一旦そこで立ち止まらなくてはならない。

「てゆうか、ロビーの手前で追いつくわ」

誘うような足音は、渡り廊下の角の先、ごく近いところから聞こえてくる。

あたしの勝ちだ。

なんの勝負がよくわからないが、美奈子にはんまりと笑みを浮かべて、がらんとした本館のロビーに足を踏み入れた。

「え……なんで？」

ロビーは無人だった。美奈子はぺたりと床にはいつくばって、規

則正しく並んだソファの下を見渡した。ひよつとしたら陰に隠れているかもしれないと思ったのだ。でも、少女は見当たらない。まるで煙のように消えてしまった。

「どこに居るの？」

大きな声で呼んでみたが、その声は広い建物内にわつと広がって、すぐに静けさに飲み込まれた。

ガラス扉の前に立っている警備員の、不審な眼差しと出会ってしまい、美奈子は急いで立ち上がった。

「あの、今ここに赤いワンピースを着た女の子が来たと思うんですけど？」

おずおず尋ねるが、警備員は無表情に首を横に振っただけだった。

床を這いずり回ったので、すっかり白衣が汚れてしまった。美奈子は更衣室で着替えると、持ち場に戻った。内科病棟の廊下には、大きな配膳台がセットされており、夕食を載せたトレイを運ぶ患者さんや食事介助のヘルパーさんたちが賑やかに行き来していた。

「瀬戸さん、いったいどこへ行っていたの？」

看護師長に叱られてしまったが、本当のことなど言えるはずもなく、美奈子はひたすら謝罪した。

「まったく、瀬戸さん。あなたは少し落ち着きがありませんね。さつきもあなたが廊下を走っていたと、患者さんから苦情が来ましたよ。だいたい、あなたは……」

「瀬戸さん、ちよつといいかな」

まだまだ続きそうな看護師長の小言が、男性の声で遮られた。

「佐藤先生！」

楽しい六人が居る病室から顔を出して、佐藤医師が手招きをしていた。美奈子は看護師長に向かって深く一礼すると、逃げるように佐藤のほうへと走って行った。

「瀬戸さんっ！ 走らないの！」

看護師長の声にドキリとしたものの、病室に逃げ込んでしまえば

こちらの勝ちだ。美奈子は転げるようにして六人部屋に入った。

静かにドアを閉めて、振り向いた途端に大爆笑された。

「美奈ちゃん、また怒られてたね」

手術したばかりの沢田さんが、腹を押さえて笑いながら苦しんでいる。笑われるのは不本意だが、一応、看護師長の攻撃から逃れられたから、まあいいか、と美奈子はペロリと舌を出す。すると隣で佐藤医師が声を殺して笑っているのに気付いた。患者さんならいいけれど、自分と四つしか歳の変わらない佐藤医師に笑われるのは、どうにも納得がいかない。美奈子は急に恥ずかしくなってきた。

真っ赤な顔を隠すために俯くと、佐藤医師が真面目な顔になって言った。

「瀬戸さんと呼んだのは、本当に用事があつたんですよ。この走り書きのことを聞こうと思って」

何かと思い彼の手元を見ると、検温のシートがあつた。走り書きとは、そのシートに美奈子を書いた末期ガンの松谷さんの言葉だった。

「ああ……」

美奈子は声のトーンを落とした。

「治療費が高い」「妻と子供に負担をかけたくない」松谷さんが言つたとおり、メモにはそう書かれている。

「そっか……。まいつたな」

「すみません、私、何か余計なこと、したでしょうか？」

「いや、そういう意味じゃないよ、ごめんね。少し考えたいことがあるから、失礼するよ」

佐藤医師は頭をかきながら病室を出てゆく。その様子を患者さんたちが心配そうに見つめているので、美奈子は話題を変えるように大きめの声で言った。

「あの、ちょっとお聞きしたいんですけど、最近病院で、赤いワンピースの女の子を見かけた方はいらっしやいませんか？」

「白いワンピースなら目の前にいるけどなあ。あ、でももう、女の

子じゃねえな」

平助おじいさんがにやりと笑いながら言ったので、皆が笑った。病室が明るいムードになったので、そろそろ立ち去ろうとすると、喉に痰を詰まらせながら、和久さんが美奈子を呼んだ。

「和久さん、どうされました？ 痰をとりますか？」

ベッドの脇に行くと、和久さんは掠れた声で言った。

「見たよ、俺、赤い服の女の子」

「え、どこで？」

「川辺さんと、談話室で話してた」

美奈子は考え込んだ。川辺さんは、もうひと月以上前から寝たきりだ。和久さんはいつたい、いつの話をしているのだろう。

いつ見たのかと尋ねると、彼は桜の頃だと答えた。およそふた月前である。その頃ならば、まだ車椅子で散歩が出来たなど、美奈子は合点がいった。でも、美奈子が聞きたいのは、そんな前の話ではない。

和久さんは美奈子の落胆した表情には気付かず、頷きながら言った。

「そうそう、可愛い子でさ。きっとあれはお孫さんだな」

「へえ、どんな子だい？ うちの孫より可愛いかね？」

隣のベッドから平助おじいさんが尋ねる。

「長い髪で、目の大きな女の子だった」

和久さんの言葉に、美奈子の心臓が大きく打った。

「和久さん、あ、ありがとうございます……」

かろうじてそれだけ言って、彼女は病室を後にした。

ドクンドクンドクン

歩くたびに、心臓が暴れ、血液が上昇するように感じる。

赤い女の子と川辺さんは、知り合いだったのだろうか？ でも、

川辺さんはもうお亡くなりになっている。それなのに、今日また病院で見かけたのは、いったいどういうことなのだろう？

和久さんの見た少女と、私の見た少女は同一人物ではないのかも

しれない。けど……。それにしても特徴が一致している。これは単なる偶然？　自分は、何か大事なことを見落としていないだろうか。疑問符だらけで頭の中が整理できない。

「ああ、わかんない」

美奈子は立ち止まって廊下の窓を見た。紫色に暮れてゆく空は、美奈子をひどく落ち着かない気持ちにさせる。

「こんなときに相談できる彼氏でもいればいいのに」

ぼつりと声に出して呟くと、頭の中に佐藤医師のとぼけたような顔が浮かんでしまった。美奈子は慌てて佐藤のヴィジョンを頭の中から追い出した。

「いかにいかに、あんな忙しい人は絶対にあたしを不幸にする！」

第三話 命というもの

ナースステーションに戻ると、もう夜勤の引継ぎ時間になっていた。今夜の担当は、ベテランの看護師長と新人のでこぼこコンビだ。小柄な新人ちゃんは、何かへまをやらかしたらしく、看護師長のお小言を喰らっている最中だった。にもかかわらず、彼女は美奈子を見つけると、「あ！」と言って、お小言を遮った。看護師長の目が大きく見開かれる。新人はそのことに全く気付かず、美奈子に駆け寄ってくるそつと耳打ちした。

「瀬戸さん、さっき彼氏が来ましたよ。紅茶館で待ってるからって」ニツと白い歯を見せて、彼女は看護師長の元へ帰って行った。美奈子は啞然として新人の背中を見つめた。看護師長のお小言を遮るなんて、すごい。すごすぎる。小柄だけど、かなりの大物だと思った。

それにしても、彼氏って誰だ？ まさか、二年前に別れたアキラくんが来たとか？

仕事を片付けて廊下に出ると、ちょうど佐藤医師とすれ違った。

彼は両腕一杯に難しそうな本を抱えている。

お先に失礼します、と声をかけると、彼はくるとロボットのように回れ右をした。そのままつかつかと歩いてくると、いきなり大きめの声で言った。

「在宅医療について、どう思う？」

「へ？」

美奈子は首をかしげた。まったく何の前触れも無しに、いったい何なのかと、眉をしかめていると、佐藤は言った。

「他の病院じゃ、もう当たり前だけど、ここではまだ訪問看護の準備がないでしょう？」

「はあ、まあそうですね……」

「松谷さんを、自宅に帰してあげたらどうかなって思っただよね」

ああ、と美奈子はようやく話の内容が飲み込めた。さつき佐藤医師に松谷さんのメモを渡したからだと気付いた。

「医療費が高いということだから、入院費削減で在宅に切り替えたらどうだろう。患者さんのもろもろの負担を考えて、自宅でケアできないのかという取り組みが、地域ぐるみで進められているんだよ。特に末期の患者さんは、最期は自宅で家族に看取られたいという希望が多いんだって。だから、瀬戸さんはどう思う？」

最期は自宅で、か。

美奈子は病室での松谷さんの様子を思った。

常に家族のことを気遣う患者さんの顔が浮かぶ。松谷さんの様子を見ていると、とにかく家族を心配させたくない、そういう気持ちを強く感じるのだ。とても痛むはずなのに、面会時間はまったくそんなそぶりを見せないで、家族が帰った後にぐったりしているのを、美奈子は知っている。そんな彼が、在宅医療をどう思うだろうか？ 美奈子はそのことを話すと、佐藤医師はがっかりしたように肩を落とした。

「そっか……。実は、松谷さんのこともあって、病院側にも在宅医療の必要性を提案してみようかと思ったんだけどね……。そんなふうに家族でお互いのことを気遣っているのなら、松谷さんに関しては、無理か」

佐藤医師はぼりぼりと頭をかいて、立ち去った。美奈子は、ふと川辺さんの最期のときの様子を思い出した。

そうだよ。患者さんは、とても苦しいもんね。苦しくて、どうしようもなくて、必死の形相で迎える最期であつたなら、愛する人には見せたくないよね。特に、一家の主であるお父さんは、そういう姿って、きつと子供たちには見せたくないんだらうなあ……

美奈子は急いで着替えると、紅茶館への坂道を降りて行った。誰だかわからない人物の元へ向かうのは、ちよつと不安だったが、紅茶館なら店長がいるから安心だ。それに、もしも昔の彼氏だったら、

当時手ひどく振られたお返しに、今こそこちらの言いたいことを言
ってやる。

鼻息も荒く紅茶館に突入した美奈子は、待っていた人物を見てコ
ケそうになった。

間接照明の灯された店内、窓際のテーブルに、救命救急の男性看
護師・宮下が座っていた。他に客の姿は無い。彼は、ニキビ面には
にかなだ笑みを浮かべて紅茶をすすっていた。なんとなく似合わな
い。

美奈子は会釈して彼の向かい側に座った。

「お疲れのとお悪いね、呼び出して。今日、警察へ行ってきたから」
ああ、と彼女は思い出した。救命から脱走した少年の件で、宮下
は身元を調べてもらおうと、警察に行ったのだ。

「で、どうでした？」

尋ねると、彼は顔をしかめた。

「名前も住所もわからなかった」

そっか……と、美奈子が手元のメニューに目を落とすと、彼は言
った。

「でも、嫌な情報を耳にした」

「情報って、なんですか？」

「最近、この辺りで『当たり屋』が居るって」

「なんですそれ？」

「車にわざとぶつかって、その場で金を請求するやつのことだよ」

美奈子が当たり屋を知らないとは勘違いしたのか、宮下は丁寧な教
えてくれた。

当たり屋といえば、運転中にわざと急ブレーキを踏んで、追突し
た後続車に法外な請求をするのが常套手段だ。その場合、警察は呼
ばずにその場でドライバーに示談を迫る。警察を呼ばないと事故証
明がとれないから、保険も降りないし、その後厄介なことになる。

なんだか物騒というよりも、ひどい話だなと思った。だけど、そ
れがいったいどうしたというのだろうか？

黙って話を聞いているが、釈然とせぬ様子が見て取れたのだろう。宮下は美奈子に向かって声をひそめた。

「どうも、その当たり屋つてのが、あの少年みたいなんだよ」

「ええ？」

大きな声が出てしまい、美奈子は思わず口元を押さえた。宮下は険しい顔で続ける。

「主婦の運転する軽自動車を選んで飛び出しては、治療費をその場でもらっている男の子が居るんだって。ハッキリ断定は出来ないが、背格好も彼によく似ているみたいなんだ」

「……まさか、そんなことって！」

美奈子の頭では、当たり屋とは車同士の設定だ。人対車でそんなことをしていて、大ケガしたらどうするのだ。ケガで済めばいいが、当たり所が悪ければ死んでしまう。

客が居なくてヒマのだろう。店長がカウンターから出てきて話に加わった。

「おいおい、それ本当かい？」

宮下は頷くと言った。

「子供だから、考えもなしにやってるんでしょう。信じられないけど、ホントみたいだよ」

美奈子と店長は顔を見合わせた。なんてムチャなことをするのだろう。そんなことを繰り返していたら、いつか取り返しがつかないことになる。

「警察のほうに、少年をはねたドライバーから数件の問い合わせがあつて、探してるって言ってた。みんな心配していて、治療費を払いたいそうだ」

宮下はそう言つて、ため息をついた。美奈子は眉根を寄せて言った。

「バカね、その子。例えわざと飛び出したって、人対車なら、車のほうが悪いんだから、きちんと名乗って堂々と治療費請求したらいいのに」

紅茶館の店内に、沈黙が降りてくる。何だか信じられない話だった。

「まさか、次また運ばれてくるようなことは無いと信じたけれど、もし来たら、すぐ警察に知らせるよ。瀬戸さんも、彼のことで何かわかったらそうしてくれないかな」

宮下の言葉に、美奈子は頷いてぼそりと呟いた。

「親や、周りの大人はどうなっているのかしら」

すると店長が寂しげに言った。

「見て見ぬふりか、あるいは親がやらせていたりして……」

美奈子は「まさか」というように店長を見つめた。命に触れる職場にいるものにとって、お金のために、そんなふうに自分を傷つける少年のやりかたは許せない。ましてや、親公認など、ありえない「お金と命と、どっちが大事ななんて、誰にだってわかるのに」

腹が立つと同時に、胸の奥がひどく寒くなった。

憂鬱な気分で紅茶館を出ると、宮下がついてきた。

「あの、宮下さん、看護師寮はすぐそこですから、送っていただくなくても大丈夫ですよ」

すると彼は慌てたように言った。

「あ、いや。ぼく、職場に……。気になる患者さんが居るので、ちよつとそちらを見てから帰りますから」

病院は闇の中に白い外壁を浮かび上がらせていた。普段はタクシーが待機している正面玄関は、明かりが消えて真っ暗だ。坂道を登りきって、建物全体が見えると、左端の奥にある救命救急センターの灯りが眩しく見えた。

じゃあ、と手をあげた宮下を見送っていると、救命の灯りの中に赤いワンピースの少女を見つけた。美奈子は声をひそめて宮下を呼び止めた。

「宮下さん、あの子。逃げた少年の友だちよ」

少女はしばらく救命の搬送口付近をウロウロしていたが、やがて

建物の中に消えた。

二人は闇の中を走って行った。走りながら、美奈子の心臓がドクンと跳ねた。少女が、また先日みたいに、跡形もなく消えていたらと思うと妙に背筋が寒い。搬送口の灯りに向かって走りながら、奇妙な妄想が美奈子の脳裏をよぎる。

瀕死の病人のそばに、ひっそりと佇む赤い服の美少女。彼女の唇に笑みが形作られ、甘い言葉が囁かれる。

痛みも苦しみもない世界へ、行きたいでしょう？

弱々しくうなずく患者の顔が、いつの間にか亡くなった川辺老婦人になっている。

じゃあ、今すぐ連れてゆくかわりに、残り一か月分の命をちょうだい……。どうせ死ぬんだから、同じことでしょう？

美奈子はあらぬ妄想を必死で打ち消した。死神少女なんて居るはずがない。

息を切らして救命の入口に駆け込むと、意外にも少女はそこに居た。振り向いた彼女は、大きな目を見開いて固まっている。

「ここで何してるの？」

少年のことで、思うところがあるのだろうか。宮下がちょっと厳しい声を出した。

少女は泣きそうな表情になり、美奈子の顔をじつと見上げた。

「あ……もしかして、彼氏がまた運ばれてきた、とか？」

チラリと横目で処置室のほうを見て尋ねると、少女は違うというように首を左右に振った。

「ここは緊急の患者さんを運び込む場所だから、用のない人は入っちゃいけないんだよ」

美奈子になるべく優しい声で諭すと、彼女は俯いて、消え入るような声で言った。

「……カイを、見てやってもらえませんか？」

「カイって、この間の男の子？」

美奈子は近づいて、少女の腕を捕まえた。ビクと震えた腕は、細

くてひんやりしている。

少女はつかまれた腕に目を落としながらしばらく逡巡していたが、やがてはつきりと言った。

「看護師さんですよ。お願いします、ちょっとでいいからカイを見てもらえませんか？ 今朝から、様子がおかしいんです」

「おかしいって、どんな？」

少女は腕を捕らえた美奈子の手首をもう一方の手でぎゅっとつかまえると、表に向かって走り出した。

「ちょっと、待って！」

ミュールを履いた足がもつれそうになった。背後にいた宮下が、慌てて支えてくれたので、間一髪転ばずに済んだ。宮下は少女を怒鳴りつけた。

「待って、言ってるんだろ！ 危ないじゃないか！」

彼の声に驚いた少女は、飛び上がって振り向いた。目に涙をいっぱい溜めている。

「あ、ごめ……なさい。あの、お願いします。カイが、死んじゃう」
「わかったから。どこに行けばいいのよ」

美奈子は背後の宮下に目配せした。彼も察したらしく頷く。これで少年の身元がわかる。

二人は少女に連れられて、今帰ってきたばかりの坂道を下っていった。

三十分ほど歩いただろうか。シャッターの下りた下町風の商店街を抜けると、高速道路の高架下に出た。

「このへんって、浮浪者が多いんだよな」

宮下が顔をしかめた。さっきから下水の臭いがするのだ。

少女は高架下をくぐってすぐのところにある、小さなカラオケスナックとシャッターの下りた弁当屋の間の路地に入って行った。

体を傾けるようにして進むと、まるで梯子のように急な角度の鉄階段が前方を塞いでいる。少女はすると音も立てずに上ってゆく。美奈子は背後の宮下を振り返った。

「あ、大丈夫だから。目、つぶってるから」

美奈子のスカートをチラリと見やって、宮下が真っ赤になる。美奈子は牽制の意味で宮下をひと睨みすると、ミニールを脱いで裸足で階段を上がった。

どうやらカラオケスナックのある建物の屋根裏らしいと気付く。無理矢理つけたようなドアから入ると、下手くそな男性の歌声がガングラン響いていた。

少女がスイッチを入れると、古い電気が点灯した。裸電球ではなかったが、小さな傘がついた照明は、物置の電気に似ている。実際、物置として使われているのだろう。天井の低い八畳ほどのスペースは、コンクリート打ちっぱなしで、隅の方に酒瓶のケースや灯油のポリタンクなどが乱雑に置かれていた。その一画に安物のカーペットが敷かれ、スチール製のベッドが一台置かれている。少年はそこで体をエビのように丸めて横たわっていた。下水の臭いがこの室内にもこもっているようだった。

辺りを見回していると、鼻の頭にシワを寄せた宮下がようやく室内に入ってきた。

少女が駆け寄って、少年の耳に何かを囁いた。途端に彼は勢い良く身を起こして少女を突き飛ばした。少女はベッドサイドに尻餅をついた。黄色い灯りの中に、ホコリがぶわっと舞い上がる。

少年は、聞きなれない言葉で少女を怒鳴りつけた。少女の顔が可哀想なくらいに蒼ざめてゆく。さらに罵る少年を見て、美奈子はハッとした。

照明のせいだけではなく、彼の顔色はとても悪かった。少年は美奈子と宮下を見て、口をぱくぱくさせたが、苦痛に顔をゆがめると再び倒れるようにして横たわった。

床にぺたりと座り込んだまま、少女が喚く。

「カイのバカ！　今、看護師さんたちに見てもらわないと、死んじやうよ！　おなかの中、ぐちゃぐちゃになって、死んじやうんだよ」
美奈子は少女のそばに行つて、彼女を助け起こした。宮下は二人

にうなずくと少年の傍らに行って毛布をめくった。少年が呻く。

下血があつたようで、少年のグレーのスウェットパンツとシーツがどす黒くなっている。

「やっぱ、内臓の傷口が開いたんだな。下手したら癒着をおこしてるかも。感染症も気になる」

救命の看護師で、オペにも入っているの、宮下はずいぶんと詳しくかった。

「一刻も早く病院に連れて行ってみてもらわないと、本当に命にかわるぞ」

少女の大きな目から、ぼろぼろと涙がこぼれた。救急車を呼ぼうと携帯を取り出した宮下のズボンを、少年がむんずとつかんだ。

「ダメ……。病院も、警察もダメだ」

「何言つてんだよ。死にたいのか？」

「金がない」

「そんなこと、言ってる場合か！」

「オレが入院したら、ヒエンが一人に……」

ごぶつと小さく血液の塊を吐くと、少年は動かなくなった。

「いやああああああ！」

ヒエンと呼ばれた少女が悲鳴のような声を上げた。宮下は少女を手で制し、小さく頷いた。

「気を失っただけだ。大丈夫だから」

ほどなくして到着した救急車に乗せられた少年を見て、ヒエンは大きく安堵のため息を漏らした。美奈子は少年の顔を覗き込んだ。救急車の狭いベッドに括りつけられたカイは、ぐったりしている。「心配いらないよ。あなたが退院するまで、この子は私が面倒みるから」

意識のない彼の口元に、笑みが浮かんだように見えたのは気のせいだろうか？

付き添いで宮下だけが救急車に乗り込んだ。彼は、救急隊員に市

立総合病院へ運ぶようにと告げた。美奈子はヒエンと共に、タクシ―を拾って後から追いかけた。

タクシ―の後部シートに崩れるように座っているヒエンに、美奈子は声をかけた。

「ねえ、どうして彼はあんなムチャなこと、しているの？」

ヒエンはぼつりと言った。

「お金がないからです」

「だからって、あんなこと……。死ぬようなマネができるんだったら、死ぬ気で働けば何とかなるでしょう？」

ヒエンは悲しそうな目で美奈子を見つめた。

「働くところが、ないです。外国人は、見つかると日本に居られなくなるって、カイが言います」

「でも……。親……。保護者とか、誰か大人の知り合いは居ないの？」

美奈子の問いには答えず、ヒエンはタクシ―の車窓から夜の街を眺めた。言いたくないのかもしれない。悪いことを聞いてしまったなど、少々反省していると、ヒエンが口を開いた。

「カイが私の親で、兄だと思ってます。私は気付いたらカイと一緒に暮らしていました。大人の人たちと同居していた時期もあったけど、どれも長くは続かなくて、結局私とカイはいつも二人でした」

少女の細い肩先が不安げに震えていた。美奈子は果てしなく落ち込んでいた。自分の理解を遥かに超えた世界が、こんなにも間近にあったということに、シヨックを隠せない。医者や看護師では治せない、現代社会の闇を見たような気がする。

「ねえ、ひとつだけ、教えてくれないかな」

美奈子はヒエンの瞳を見つめて問いかけた。

「どうして、事故のときに現場を離れたの？　カイがのたうちまわっているのに、どうして？」

ヒエンは長い睫毛をそつと伏せた。

「カイがそうしろと、いつも言うから。万が一、相手が警察を呼ん

だ場合、私が捕まらないようにするためだそうです」

伏せた睫毛の先から透明な涙があふれ、少女のなめらかな頬を伝う。

「カイは悪くないです。お金はもらったものです。私たちは悪いことはしていません」

「でも……」

でかかった言葉を美奈子は飲み込んだ。

不法滞在。たぶん、そうなのだろう。それは、明らかに違法だ。

「悪いことしてないのに、なぜ警察を避けるの？」

意地の悪い言い方だと思ったが、きちんと教えてやったほうがいいと思い、美奈子はヒエンの顔を覗き込む。少女はうつむいたまま小さな声で言った。

「警察は私たちを捕まえます。それは、私たちがどこにも存在しない人間だから。私たちは、ゴーストなんです。ゴーストは嫌われる。警察以外の人は、私たちがまるで存在しないかのように、通り過ぎてゆきます。私たちには祖国もなく、親もなく、……希望もない。ただ、毎日を生きるだけなんです」

タクシーが市立総合病院に到着した。救急車はまだ搬送口に駐車していたが、カイと宮下の姿はなかった。

救命センターの中に入ると、背の高い救命医がブルーの手術着を身につけてオペ室に消えたところだった。

美奈子は廊下の片隅にあるソファにヒエンを座らせた。彼女は両手を膝の上で組み合わせて、じっと俯いている。

尋ねたいことがたくさんあったが、とても話しかけられる雰囲気ではなかった。

三十分ほど経過したころ、ふいにヒエンが呟いた。

「死神は、いらない命をもらいに来るんだって」

美奈子はどきりとして隣に座る少女を見つめた。

「死神って、何の話？」

ヒエンは膝の上で組んでいた手をほどくと、自分の目元をこすった。彼女は思い出すかのように虚空を見つめて言った。

「前に一度カイがこちらに運ばれたとき、病棟で会ったお婆さんが言ってたの。死にたくない人間もいるけど、逆に死にたい人間もいるんだよって。そういう人はお願いすると、死神の女の子が命を早めにもらいに来るの。それで、残りの命を、死にたくない人間に分けてあげるんだって」

美奈子の脳裏に、優しい老婦人の顔がクローズアップされる。しわがれた声が頭の中に響いた。

この小娘は……。遅い、何故もつと早く来なかったんだい。パズルピースがはまったように、美奈子の中で、カチリと音をたてて何かがつながった。

川辺さんは、死神の女の子を待っていたのだろうか。

「……バカなカイ。オレはいつ死んでもいい、なんて言うから、死神が勘違いしたんだよ」

少女は鼻をすすった。小さな花のような唇から、切ないささやきが漏れる。

「死神さん、お願い。カイにいらない命を分けてあげてください。

カイは、本当は死にたくないんです……。お願い……」

少女の肩をそっと抱き寄せて、美奈子も生まれて初めて死神に祈った。

この世に、いらない命というものがあるのなら、どうかあの少年に……。

梅雨が明け、連日猛暑が続いている。当たり屋の少年・カイは一命を取り留めて、美奈子の勤務する内科病棟に移された。

美奈子が病室に顔を出すと、彼は笑顔で話しかけてくるようになった。検温を済ませて病室を出た美奈子を、カイが点滴スタンドを引きずりながら追いかけてきた。

「あの……ヒエンは、元気にしてる？」

「大丈夫よ。昨日会ったけど、元気そうだったよ」

カイは安心したように大きく頷いた。ヒエンは今、隣の児童養護施設で暮らしてる。

「あさつて、お見舞いに来るそうだから、なにか欲しいものがあつたら、連絡してあげるけど？」

彼は要らないというふうに、首を横に振った。やはり、お金のことが心配なのだろう。でも、こればかりはどうすることも出来ない。宮下の話では、彼らの親は不法滞在で本国に強制送還されてしまったらしい。別れるのはつらいけれど、日本に残してやったほうが、カイたちにとって幸せだとも考えたのだろうか？　いくら考えても、結局他人の事情はわからないのだけれど。

カイの体調が戻ったら、二人は親元へ強制送還されることが決まっている。

「ほら、ベッドに戻つて。また出血したら大変よ」

美奈子は追い立てるようにして彼をベッドに戻らせた。

腕時計に目をやり、慌ててナースステーションに駆け込むと、看護師長に叱られた。

「瀬戸さんっ！　走らないの。何度言ったらわかるの？」

「あ、でも、これから訪問看護の当番なんですよ」

「え、まあ！　大変。早く仕度しなさい。まったくあなたは、どうしてこう慌ただしいのかしら」

いつものお小言をやりすごし、美奈子は医療キッドの入った大きな黒いバッグを提げて、駐車場に向かった。

空調の効いた建物から一步出た瞬間に、くらりとする。眩い夏の陽射しが照りつける駐車場で、佐藤医師が待っていた。彼の横には『市立総合病院訪問看護サービスカー』と書かれた軽自動車が停まっていた。

「瀬戸さん、五分の遅刻」

「すみません、先生」

佐藤はふうとため息をついて、白衣姿のまま運転席に乗り込んだ。シートベルトを締める美奈子に、佐藤がぶつくさ文句を言う。

「まったく、市立総合病院の記念すべき第一回訪問看護だつていうのに、遅刻かよ。先が思いやられるな」

ちらりと横目で見ると、佐藤の目が笑っていたので、美奈子は言い訳せずにぺろりと舌を出すだけに留めた。機嫌は悪くないらしい。以前、末期がん患者の松谷さんのコメントを読んだ佐藤医師が、末期の在宅医療を提案し、即採用されたのだ。

最期のときは、自分の家で家族に見守られながら……と願っている患者さんはやはり多い。それに、入院費の心配をしながらでは、なかなか治療自体に対して積極的になれないこともあり、訪問看護の導入を、佐藤医師が中心となつて、強く病院に交渉したらしいと聞いている。

ハンドルを握りながら佐藤医師が言った。

「もつと前から計画だけはあつたみたいんだけどね、看護師と医師の体制ができていなかったんだ。まあ、今もボランティアみたいなもんだけどね」

訪問看護に携わる看護師や医師は、病院内で立候補が採られた。その結果、医師は四人、看護師は七人しか集まらなかったのだ。スタッフを訪問看護に出すほうの係も、人員が不足していて厳しいというのがその理由だった。

内科からは、佐藤医師ともう一人、研修医の先生がメンバーになつており、看護師は美奈子と例の大物新人ちゃんだった。彼女の言い分が、またすぎすぎたから、先日ひと波乱が巻き起こった。

「研修医の鳴沢先生つて、超美少年系だし、佐藤先生は癒し系でしょう？ どっちにするのか選ぶなら、もつと仲良くならないとね」

なんて不純な動機なのかと、看護師長がキレそうになったのは言うまでもない。余談だが、救命の宮下看護師も、訪問看護のメンバーに立候補したと聞いている。しかし、彼は救命スタッフから猛反対をくらってしまったらしい。美奈子はそれを聞いてもつともだと

思った。気持ちは嬉しいが、救命はただでさえ忙しいのに、そんなことをしたら彼の体が持たないだろう。

佐藤医師の運転する車は閑静な住宅街に入った。これからトップで訪問するのは、松谷さんのお宅だ。

彼にはまだ告知はしていない。けれど、入院費のことが気になっていたようだったので、美奈子が試しに在宅看護の話をしたところ、二つ返事で了承し、昨日退院したのだ。

庭先で洗濯物を干していた奥さんが、にこやかに出迎えてくれた。一階の入口に近い部屋に、松谷さんは居た。

清潔な室内は、とても日当たりが好くて居心地が良さそうだ。窓際にたくさんのお観葉植物が置かれており、天井からは子供たちの作った折り鶴が下がっていた。

「妻が、電動式のベッドを手配してくれたんですよ。レンタルでこんな立派なものがあるなんて、知りませんでした」

佐藤医師はにつこりして言った。

「本当だ。こりゃ、病院のベッドなんかより、百倍寝心地が良さそうだ」

診察を終えて玄関を出ると、奥さんが追いかけてきた。何事かと振り返ると、冷たい缶コーヒーを二本差し出された。

「先生、看護師さん、ありがとうございます。昨夜、主人とゆっくり話しました。結婚して以来、あんなに真剣に心の内を見せ合ったのは初めてでした」

よかったですね、と美奈子が言うと、奥さんはぺこりと頭を下げて言った。

「……あの人、自分の病氣、正確に知ってたんですよ」

「え？」

やっぱり、と言う顔で佐藤が美奈子のほうをチラリと見た。美奈子はプルプルと小刻みに首を振った。どんなことがあったって、患者さんの前で病名を言ったりはしていない。

奥さんはその様子に「違うんです」と言った。

「彼、インターネットを使って自分で調べたんですって。点滴に使われている薬品とか、自分の自覚症状とかで、素人でもわかるみたいですね」

二人は黙り込んだ。奥さんは美奈子の手にひんやりした缶を握らせると、やわらかく微笑んだ。

「私たちは大丈夫です。こうして、先生たちのおかげで、家族の時間が持てたのですから。これからの時間を目一杯、家族で大切に過ごします」

車に戻ると、二人は冷えた缶コーヒーを一気に飲んだ。ほろ苦い味が広がって、胸がじんとした。

佐藤医師は車を発進させると、ちよつと寄りたいたいところがある、と言った。

美奈子は無言で頷いて、助手席の窓から外へと目を向けた。ガーレールに沿って、真つ赤なカンナの花が延々と続いている。まるで、ヒエンのスカートみたいだと思った。

あの日、松谷さんの病室から出たときに見た後姿は、果たしてヒエンだったのだろうか？ ロビーで忽然と姿を消した少女は、本物の死神だったのかもしれない。もしもあのまま松谷さんが生きるのをあきらめてしまったら、きっと彼女はその先のいらぬ命をもらいに來ていたのかもしれない。訪問看護によって、ちよつぱり生きる希望を取り戻してくれた松谷さんには、もう死神少女は近づかないだろう。

物思いに耽っていると、車が止まった。立派な日本家屋が目の前にある。緑濃い生垣から覗いた瓦屋根が、夏の陽を浴びて艶めいて見えた。

「瀬戸さんも、一緒に来る？」

美奈子は助手席から乗り出すようにして表札を見た。『川辺』と書かれているのを見て、彼女は気付いた。

「ここって、あの、川辺さんの？」

佐藤医師は頷くと言った。

「一度、お線香をあげたいなと思っていたから」

美奈子も頷き返して車を降りた。あの夜の、苦い思いが込み上げる。何度経験しても、慣れることのない臨終の場面。美奈子は隣に立って呼び鈴を鳴らす佐藤医師を盗み見た。彼の心の器には、自分よりも、きつと、ずっと多くの思いがしまいこまれているのだろう。立派な門構えの引き戸を開けると、犬の鳴き声と共に川辺さんの息子さんが姿を見せた。

佐藤医師が挨拶すると、息子さんは笑顔を見せて、すぐに二人を仏間に案内してくれた。

仏壇の前で手を合わせ、美奈子は遺影を見上げた。写真の中の川辺さんは、桜を見たころの穏やかな表情で微笑んでいた。

次の患者さん宅へ向かうため、いとまごいすると、少々お待ちください、と言って、息子さんが風呂敷に包まれたものを持ってきた。「これは、母の遺品なんですが、『看護婦さんへ』っていう手紙が添えてあったので、母の担当だった方にお渡しただけじゃないでしょうか」

佐藤医師に促されて、美奈子は包みを受け取った。

「あの、ちよつと中を拝見してもよろしいですか？」

高価な物だったら困ると思い、美奈子は了解を得てから包みを解いた。中から白い封筒に入った手紙と、一冊の絵本が出てきた。絵本の表紙には、可愛らしい女の子が描かれている。手にとって開こうとすると、息子さんが言った。

「実は、これ、母が書いた童話なんですよ」

「え？ 川辺さんは、作家さんだったんですか？」

目を丸くする美奈子に、息子さんは「違いますよ」と、手をあげた。

「母は小学校の教員でした。この絵本も、何年か前に、クラスの生徒さんのために書いたらしいです。自費出版ってやつですよ」

「へえ、とても教育熱心な方だったんですね」

佐藤が言うと、息子さんは曖昧に笑って言った。

「実は、母のクラスの生徒さんが突然お亡くなりになって、そのとき書いたみたいです。ぼくは良く事情を知らないんですけれどね」
美奈子と佐藤は目を見合わせたが、とりあえず絵本をいただいて帰ることにした。

「そうですか。じゃあ、遠慮なくいただきます。入院している子供たちに見せてあげよう」

美奈子と佐藤医師は川辺さん宅を辞した。

車の中で、美奈子は封筒を手にとった。

「困りましたね、先生。『看護婦さんへ』って言っても、誰宛てなのか、わかりませんよ」

「看護師たち全員へのお礼か何かの手紙じゃないのかな。俺も大学病院時代に、よく『先生へ』っていう手紙、子供からもらったよ」

佐藤医師はたいして気にも留めない。

「でも、仮にも元教師ですよ？ 確かに私たちって、あまり名前で呼ばれたりしないけど、こんな宛名って……」

「でもさあ、担当だったのって、瀬戸さんが真弓さんなんじゃないの？ それなら、二人で開けて読んでみなよ」

「う…… 苦情だったらどうしよう」

気分が良いときはにこやかだったが、川辺老婦人はけっこう気難しいところがあったのも確かだ。

「後で何が書いてあったのか、教えてね」

にやりと笑って、佐藤がトドメを刺す。美奈子は手紙と絵本を元通りに包み直した。

昼の休憩時間になると、美奈子は真弓を誘って屋上へ向かった。万が一、苦情だったりしたら、他の看護師たちにはあまり知られたくない。

二人で足早に階段を上がり、屋上への鉄扉を押し開けた。

「うわあ、いい天気」

真弓が歓声を上げた。真っ青な空が、迫ってくるようだ。二人は何台も並んでいるエアコンの室外機の脇を通り抜けて、色の剥げ落ちたベンチに座った。

美奈子が包みを解いて封筒を抜き出すと、真弓がごくりと唾を呑み込んだ。

「手紙、何て書いてあるんだろうね。ちょっとドキドキする」

真っ白な便箋を開くと、美しいペン字が目飛び込んで来た。二人は、顔をくっつけ合うようにして、文章に目を走らせた。

看護婦さんへ

これを読まれるときには、私はもう死んで肉のかたまりとなっていることでしょう。

最期のときに、自分の口から直接お礼を言いたいと思っておりますが、きつとその場になったら、自分の意思は保てないのではないかと懸念し、こうして文章にしたためておきます。

余命いくばくもなく、ただ死に逝くのみとなり、生死について考えました。

理想では、残り少ない日々を出来るだけ穏やかに笑顔で、いままでお世話になった人たちへの感謝の気持ちだけを胸に、最期まで精一杯生きてゆこう、そんなふうに決めていました。でも、実際に病の苦痛に襲われたときは、早く死んでしまいたい。この苦しみから逃れられるのなら、今すぐ悪魔に命をくれてやってもいいと思う自分が居ることも否定できません。

そんな暗い気分ときには、一生懸命看護してくださるあなたの笑顔さえも、受け付けることができない。せつかく差し延べてくれた介抱の手を、振り払ってしまったこともありましたね。許してください。

私は教師として何百人もの生徒を教え、導いてきました。生徒たちに、えらそうなことをたくさん言いました。生について、死について、多くを語りました。人生の終焉を迎えるにあたって、私なり

の幕引きを思い描いたりもしました。けれども、そんなものは何の役にも立たない。私の思いは落ち着きなく日々揺れ続けていました。あなたの笑顔に励まされたときには、もっともっと長く生きたいと思ひ、病の痛み苦しめられたときは、早く死んだらもうあなたの眩しい笑顔を見なくて済むのだと。

それでもやっぱり、最後には生きていたい。生きていて、笑顔に見守られていたい、そう思うのでしょね。

とりとめのないことばかりですみません。

末筆になりますが、看護婦さん、ありがとう。あなたと一緒に見た、最期の桜を忘れません。

川辺しず子

便箋に、どちらのものともわからぬ涙がはたりとこぼれ落ち、インクの染みが広がった。

桜を見上げて微笑む老婦人の顔が、美奈子の脳裏に鮮明に甦って来た。

隣で鼻をすすりながら、真弓が妙に明るい声で言った。

「なんか、最後でちよつと拍子抜けしちゃったな。私、川辺さんと桜を見てないもの。これって、きつと美奈ちゃんへの手紙だよな」

美奈子も慌てて目元をぬぐうと、手紙をかさかさと折りたたんだ。川辺さんの手紙はとても嬉しかったが、真弓に悪いことをしてしまったかな、という気もしていた。美奈子はわざとふざけたように言っただ。

「実はさあ、川辺さんの最期の言葉があまりに不気味で、ずっと心が重かったんだよ。今、この手紙を読んでようやく気持ちが軽くなった気がするよ」

「ええ？ 川辺さん、最期になんておっしゃったの？」

美奈子は真弓に老婦人の言葉をそのまま伝えた。

この小娘は……。遅い、何故もつと早く来なかったんだい。まったく、本当に……。なんて役立たずな子……。

「それはきつと美奈ちゃんのことだよ」などと、からかわれるかと

思ったが、真弓は真面目な顔つきで美奈子の手元の包みを見つめている。

「真弓さん……どうかした？」

真弓は、美奈子の手から風呂敷包みを取り上げた。

「あの話ね、実は川辺さんから聞いたんだよ」

美奈子は首をかしげた。あの話って、なんだろう？

真弓は包みの中から絵本を取り出して、膝に乗せた。

「死神の女の子の話、あれ、いつか川辺さんが話してくれたのよ」

美奈子は真弓の膝に乗せられた絵本を見て、あっと声を上げた。
『いらない命』というタイトルだった。

『いらない命』

暑い夏が遠ざかり、入れ替わりに秋がやってきました。秋は澄んだ空と爽やかな風をお供に連れていきます。

風が森を通り抜けたとき、木の幹からぽとりと蝉が落ちました。風は言いました。

「もう夏は行ってしまったよ」

蝉は仰向けになったまま、六本の足を弱々しく動かしました。

そこへひとりの少女がやってきました。少女は地面に落ちた蝉を手のひらに乗せて言いました。

「蝉さん、もう、死んじゃうね」

蝉は頷きました。

「秋が来たんだ。私の命はあと半日もないよ」

「じゃあ、その半日を私にちょうだい」

「どうせ死ぬんだ、いいよ」

蝉は死にました。死んだ蝉は、少女の手のひらで、一粒の薬になりました。

道端で、車にはねられた野良猫が息絶えようとしていました。

猫は痛みに顔をしかめながら呟きました。

「私のお腹には赤ちゃんがいるの。どうか後もう少しだけ生かしてください」

そこにさっきの少女が通りかかりました。少女はポケットから一粒の薬を取り出して言いました。

「猫さんに、半日ぶんの命をあげる。そのかわり、もし余ったぶんがあれば、わたしに返してくれる？」

猫はうなずくと、薬を受け取ってにつこりしました。

薬を飲んだ猫は、半日たたずに三匹の仔猫を産みました。元気な子供たちの様子を見届けた母猫は、少女に向かって言いました。

「私はもう助かりません。子供の無事も見届けました。残りの命はあとわずかですが、お約束を守ります」

猫は死んで、少女の手のひらにまた一粒の薬が残りました。

秋が駆け足で通り過ぎ、やがて冬がやってきました。

少女はたくさんの出会いと別れを経験しました。死にゆく者たちから、残りの命をもらい集めるのが、少女の望みだったのです。

少女は病院の前に立っていました。

この病院には、少女の大切なお友だちが入院しています。

お友だちは、とても重い病気にかかっていました。春が来るまでに死んでしまうと、お医者さまから言われているのです。

少女はどうしてもお友だちを助けたいと思いました。だから少女はお友だちのために、半年かかって命の薬を集めたのです。

お友だちは、少女の顔を見ると、うれし涙を流しました。

「どこに行っていたの？ とても会いたかった」

「あなたが長く生きられるよう、いろいろな命をもらって歩いていたの」

そういつて、少女は小瓶に詰めたキラキラ光る薬の粒を見せました。

「これだけで、あと半年は生きられるよ。よかったね」

笑顔に向けた少女に、お友だちは寂しそうな顔で言いました。

「それでも、半年したら、わたしは死んでしまうのでしょうか？」

「大丈夫よ、それまでにまた半年かけて、私が薬を集めてくるからお友だちは悲しい目で少女を見て言いました。

「ねえ、あなたの手元の美しいもの。それは本当に、いない命なのかしら？」

翌朝、お友だちは一粒の輝く薬になっていました。自分で自分の命を絶つたのです。

少女は薬の粒をそつと拾って小瓶の中に入れました。

涙があふれてきて止まりませんでした。いったい自分は何のために旅をしてきたのか、わからなくなってしまうました。

なぜ、お友だちは薬を飲まなかったのでしょうか？ 少女は小瓶の中の輝きに向かって叫びました。

「飲めばよかったのよ。生きていたって、言っただじゃない。満開の桜が見たいって、言っただじゃない！」

空のベッドに突っ伏して、少女は泣きじゃくります。

「飲めばよかったのよ。だってこれは、いない命のかたまりなんだよ？ 大事なものを、簡単に人にあげてしまうわけが、ないじゃない。ねえ、そう思わない？ みんな、いないからくれたんじゃないの？ これは、いない命なんじゃないの？」

じゃあ、私の命も、いない命なのかしら？

少女はハツとして、小瓶の中を覗きこみました。透明なガラスの中で、光の粒たちがまるで星のように明滅していました。

「じゃあ、この粒は、いったい何なの？ 何のために、あるの？」

答えを見つげるために、少女はまた旅に出ました。小さな胸に、たくさんの光の粒を抱えて。

おしまい

美奈子がかぶっていたナースキャップをとると、泣き顔を隠すように目元に当てた。

「きつと、川辺さんは、この少女が現れるのを待っていたんだよ」

真弓の言葉に、美奈子は何度も頷いた。川辺さんは、自分の生み出した少女に、精一杯の愛情を込めて「小娘」と呼んだのだろう。

「そうだ、美奈ちゃん知ってた？」

「なに？」

「川辺さん、ご自分の遺体を検体としてS大学附属病院に提供したんだって」

「え？」

医学のために、自分の体を差し出すのは、医療現場に居るものでさえ、なかなか出来ることではない。切り刻まれて、ばらばらになつてしまつかもしれないといつて、なかなか家族の理解を得られないのだと聞いたことがある。

「あ、だから、肉のかたまりつて書いてあったんだ！」

美奈子は手紙の冒頭を読み返した。止まっていた涙が再び溢れてきた。

美奈子は手紙と絵本をぎゅうと胸に抱きしめた。

この本の中の二人の少女は、きつとどちらも川辺さん自身だったのかもしれない。

「ねえ、真弓さん。前に、真弓さんが私に言ったこと、覚えてますか？」

うん、と真弓は頷いた。

つらい治療に堪えている患者さんに対して、美奈ちゃんみたいに心の底から素直に『ガンバレ』なんて、言えないときがあるよ。私、あのときはわからなかったけれど、今ならその意味がわかります。でも……」

美奈子は絵本の包みを抱きしめたまま、懸命に笑顔を作った。

「でも、私はやっぱり応援したい。最期まで、命をあきらめないでと言います。だって私は、死神少女じゃないから」

真弓がクスツと笑って、美奈子の手からシワになったナースキャップを取り上げた。丁寧に形を整えると、真弓は美奈子の頭をくしやりとひと撫でてから、キャップを留めつけた。

「これからも、命に対して様々な考え方に逢うでしょう。でも、私たちは看護師であることを忘れてはいけないよね」

「うん。それに、この世に『いらない命』なんて、絶対に無いんだから」

湿った風が、二人の白衣をふわりと撫でた。空を振り仰ぐと、さつきまで雲ひとつなかった夏空に、積乱雲がもこもこと集まっていた。

ふと耳を澄ますと、下界から救急車のサイレンが聞こえてきて、二人ははじかれたようにベンチから立ち上がった。

「さあ、美奈ちゃん。仕事しなくちゃ」

「そうですね、先輩。患者さんが待ってる」

二人はサンダルの音を残して、慌ただしく屋上から出て行った。

了

第三話 命というもの（後書き）

お読みくださいますと、どうもありがとうございます。
何でも良いので感想などいただけるとうれしいです。 冴木 昂

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0300v/>

赤い服の少女

2011年7月23日03時31分発行